

(令和二年二月二十七日)

願い込め母の贈りし天満の守袋を握る試験日

(安村 太智)

飛んできたまるで飛び梅太宰府へ人生一度好きなどこ行こ!

(大石 未来)

時を経て土に埋もれし都府楼は礎石のみ残し静か佇む

(陣内 敏夫)

本を閉じ改札通り深呼吸あの人がいたあの人の街

(別所 有希)

快晴の宰府詣での人らみな晴れやかなりき令和が明ける(関本 美津代)

疎開の地坂本八幡令和にて孫に語りて昔を忍ぶ

(吉田 玲子)

紅に燃ゆる紅葉を二人見て我らの微笑遥か先まで

(古賀 百花)

初春の都府楼の空澄み渡り駆けずり回る子の声弾む

(白井 道義)

七五三晴着で渡る太鼓橋祝いの笑顔千歳の飴に

(横山 美恵子)

晩秋の太宰府他国の人々多し飛びかう会話意味わからず

(三谷 忠夫)

初春に孫といっしょに天満宮頭良くなると牛の頭まで

(力久 光博)

飛梅に願いをこめて大吉を引いた心は桜満開

(池田 みずほ)

梅の花散りゆく様と裏腹に我がこの想い芽生ゆるばかり

(大田 愛理・松岡 優采)

久しぶり岩屋の城に登り立つ夫カレとの思い走馬灯の如し

(永留 妙子)

3人で歩くこの道笑い絶えずはるが来る頃伝説となる

(白井 彩夏)

小・中学生の部

おまもりを片手に望む朝日見て梅の開花と合格をまつ

(舎川 陽香)  
とね

うめのもちはなとおなじでみなうまくそれぞれちがうもちのあじわい

(赤松 迪)